

株式会社 弘輝

それぞれの部門の特性に合わせた
きめ細かなセミナー教育を実施

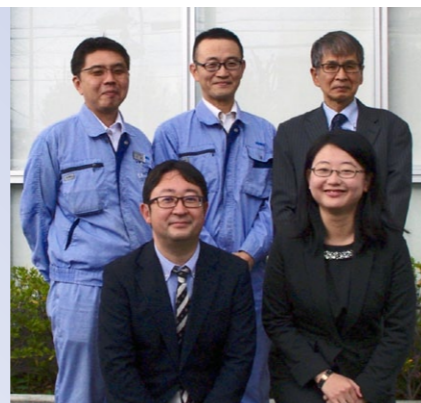
はんだ付け接合技術のプロフェッショナル集団。
ソルダペースト、フラックス、接着剤、やに入りはんだなどの
電子材料の総合メーカーであり、新たな価値を生み出し続けている。
高品質の製品と技術サポートをグローバルに提供。
世界市場における弘輝のシェアは約7% (2017年調べ) であり、
はんだメーカーの五本指に入るほどの実力を備えている。

主な権利

2017年：特許 第6082952号
2017年：米国特許 第9764430号
2018年：特許 第6349615号
2018年：商標登録 第6032026号
2018年：特許 第6427752号

会社概要

所在地：東京都足立区千住旭町 32-1
電話：03-5244-1511
URL：http://www.ko-ki.co.jp
業種：はんだ付け材料の開発・製造・販売
設立：1964年 (昭和39年)
資本金：6,000万円



技術本部 技術企画部 次長：古澤 光康さん (後左)
技術本部 開発1部 次長：内田 令芳さん (後中)
管理本部 次長 知財担当：米山 敬文さん (後右)
管理本部 課長 知財担当：入澤 淳さん (前左)
管理本部 知財担当：相澤 沙織さん (前右)

売上の85%以上が海外という
「はんだ」のグローバル企業

とても奥が深いはんだ付けの世界の先駆者である。1957年に日本で初めてプリント配線基板用の噴流式自動はんだ装置などの輸入販売を開始し、広く電子産業界に紹介してきた。以来、はんだ付けに関する周辺ノウハウを蓄積し、装置の製造技術を習得して国内生産を開始。1964年に会社を設立した。

株式会社弘輝は、モノづくりには欠かせない電子部品を基板に接合するためのさまざまなはんだ付け材料を製造・販売。ソルダペーストと呼ばれるクリームはんだを中心としたはんだ付け材料は、車載、医療、LED照明、ウェアラブル機器、パワーデバイス、半導体、産業機械、航空・宇宙など、幅広い分野に用途を拡大しながら貢献している。

また、早くから海外市場での展開を進め、現在は売上の85%以上を海外で占めるグローバル企業でもある。韓国、中国、デンマーク、ポーランドに自社の生産工

場を設立するなど、地球規模で多様な電子機器の進歩発展をサポートしている。

共同開発の契約における
苦い経験も成長の糧にする

そんな同社であるが、知財センターによるニッチトップ育成支援がスタートする前は、海外での保有特許権はユーザーとの共同開発品に限られ、すべて共有特許権だった。

また、知財に関する苦い経験も味わってきた。共同開発における契約は、どう結んだら良いか見極めるのが難しい。A3サイズ1枚の契約書を前にしながら、判子を押すのに悩んだこともある。大企業と渡り合うためには知財管理体制をしっかりと確立させることが急務であると痛感した。

そうした経験から、知財センターを訪れるようになる。最初は、契約書の検討や特許の中間処理の対応のために利用。やがて、それまでの状況を打開し、独自開発品の海外展開をはかるために、2014

年の外国特許出願費用助成事業に応募し、採択された。

当時の知財担当者は、開発部兼務の入澤氏と管理部兼務の米山氏の2名だった。入澤氏は「以前は開発をしながら他社と共同で特許を出願していました。元々はノウハウとして隠していたものが、技術の進歩とともに内容が外に分かるようになってきた。そうしたことから、自社での特許出願が重要だと考えるようになりました」と語る。

系統立てた学びの世界で
知財への理解が深められる

そして2015年から知財センターによるニッチトップ育成支援を開始。全社員の知財に関する意識を高めたいとの要望で、セミナーによる基礎教育から開始した。

この取り組みの大きな特徴は、各部門の特性に合わせた、きめ細かな教育内容だった。主なポイントを挙げると、営業部門に対しては、秘密保持の開示方法と注意点について説明。製造部門に対して



はんだ付け材料製品群。洗浄用、パンプ形成印刷用、PoP実装用、ダイボンド用、フリップチップ用、アンダーフィル対応、ディスペンサー用、レーザー対応、高温/低温タイプ、端処理用などがある。



同社を代表するソルダペースト。多様なラインナップで幅広い要望に
応えている。



(左) 東松山テクノセンターにはショールームがあり、海外からの来訪者に対しても、同社の技術を分かりやすく紹介している。
(右) ソルダペーストの開発への貢献を認められ、2017年3月、富士通テン株式会社 (現：株式会社デンソーテン) から「技術開発優秀賞」を受賞した。

は、工場見学者への製造方法の開示について注意点を説明。また知財担当者には、知財に関する新人教育ができるレベルにまでサポートを行った。

開発1部の内田次長は「知財の調べ方など、初歩的などころから丁寧に教わりました。複雑なものをどう読み解くかは、最初は慣れず難しく感じたのですが、その入口が分かったことは大きかったですね」と語る。

また、技術企画部の古澤次長は「それまで私なりに特許を勉強して知っている自信もありました。しかしアドバイザーに、審査請求せずに捨てられた特許出願について聞いた時、認識の違いに気づかされました。捨てられていても、そこに記載されている技術の一部を権利主張している先の特許出願があるかもしれないから、無条件での使用は危険だと教えてもらい、目から鱗が落ちるようでした。今後も勉強を続けたいですね」と語った。

管理部内に知財部門を設けて
より強固な社内体制を確立

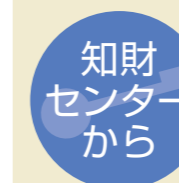
こうした一連の取り組みによって、開発部門においては、技術の特許化する意識が非常に高まった。また、経営層の知財に対する理解も深まり、ニッチトップ育成支援修了直前の2018年1月の組織変更で、知財担当の2名をそれまでの兼務から知財専任とした。管理部の米山次長は「会社全体で知財の重要性を認識し、さらに前向きに取り組むために、管理部の中に知財の部隊を設け、1名を増員して3人体制にしています」と語る。法務の相澤氏の採用によって、より強固な社内体制を確立したのだ。

ニッチトップ育成支援では、新しい職務発明規程の作成と運用、技術契約書のひな形の作成と一元管理の方法についても支援を受けた。社内外にしっかりと目を向けた取り組みが続いたのである。

部門を越えた多くの人材が
知財交流会に継続的に参加

近年は知財センターが開催する知財交流会にも継続的に参加している。特に知財担当者以外の管理部門、営業部門も参加し、知財への認識をさらに深めている。今後について米山次長は「いずれは当社の特許を使ってもらえるような方向性を考えていきたいですね。保有している特許を売り込めれば、マーケットも広がりますし、会社の知名度アップにもつながると思います」と語った。

弘輝という社名は、広いスケールでひとときを輝かすという想いから名付けられている。グローバルに何かと何かを結びつける同社の活躍と、その輝きがこれからも期待される。



全社一丸の取り組みから組織のレベルアップへ

ニッチトップ育成支援では、全社員に対しての知財のセミナー教育から始め、営業部門、製造部門、知財担当者それぞれに合わせたサポートを行いました。そうした全社的な取り組みに加え、経営層のご英断もあり、兼務から知財専任の体制になりました。これからのに向けた基盤づくりのお手伝いできたと思います。 担当：城東支援室 小高アドバイザー